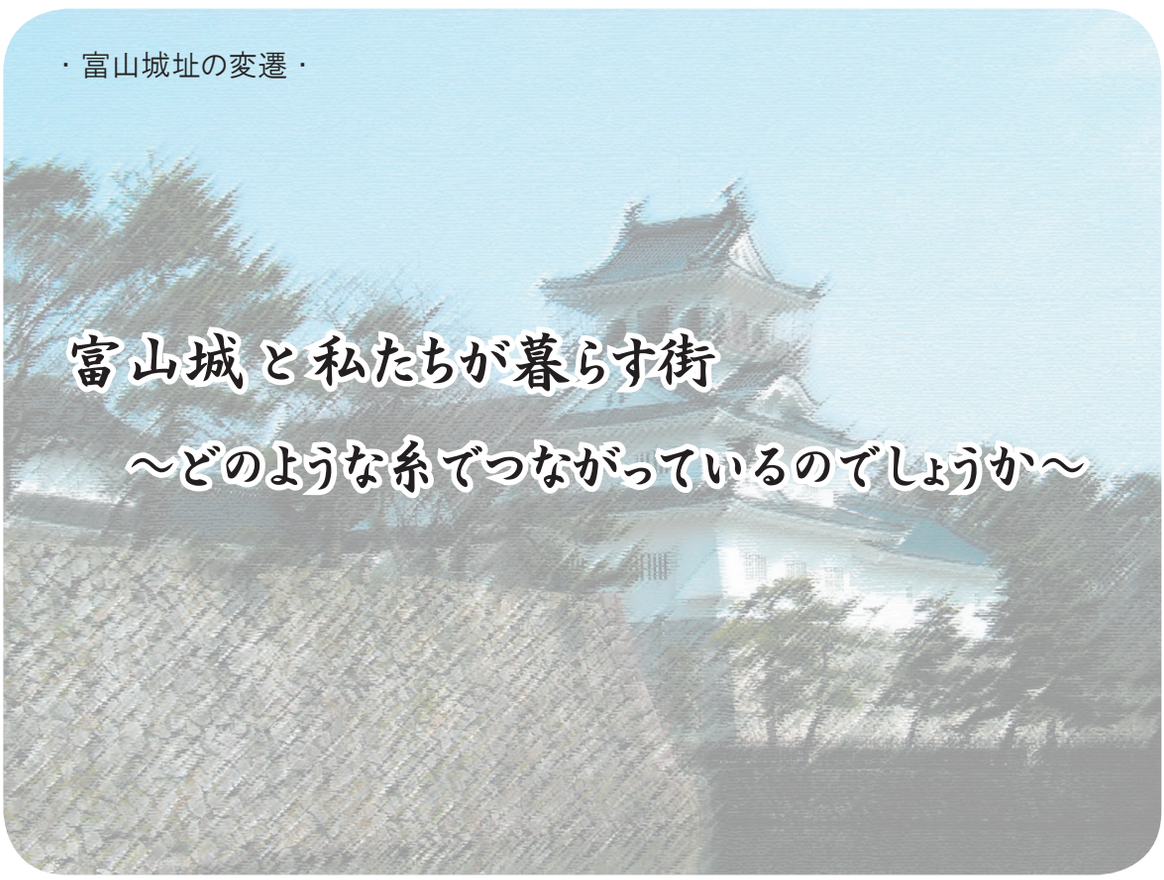


・富山城址の変遷・

富山城と私たちが暮らす街

～どのような糸でつながっているのでしょうか～

富山市郷土博物館（富山城）

目　次

はじめに　・・・・・・ 1

富山城址の変遷　・・・・・・ 2

(1) 明治時代のお話　・・・・・・ 4
①三之丸の解体と街づくり　・・・・・・ 5
②二之丸の解体　・・・・・・ 8
③東出丸・千歳御殿の解体　・・・・・・ 9
④富山県庁と富山城址　・・・・・・10

(2) 昭和初期のお話　・・・・・・13

(3) 戦後のお話　・・・・・・15

＊天守閣の建設＊　・・・・・・17

富山城の専門博物館　・・・・・・18

はじめに

富山市郷土博物館（富山城）は、約２年半にわたる改修工事を終え、平成１７年１１月３日に、富山城の歴史を紹介する博物館としてリニューアルオープンしました。展示室に入ると、そこには新しい展示テーマ「富山城ものがたり」の世界が広がっています。

富山城の歴史といっても、あまり詳しいことは知らないなという方が多いのではないでしょうか。それでは、簡単に富山城の歴史を振り返ってみましょう。

富山城は天文（てんぶん）１２年（1543）に、神保長職（じんぼながもと）によって築かれました。実際の縄張りは家臣の水越勝重（みずこしかつしげ）によってなされたと伝えられています。その後、越後長尾氏（上杉氏）や一向一揆（いっこういっき）などによる争奪の場となり、さらに佐々成政（さっさなりまさ）、前田利長（としなが）の居城となりました。次いで加賀藩から富山藩１０万石が分藩し、寛永１６年（1639）に初代藩主前田利次（としつぐ）が入城しました。以後、明治時代に至るまで、約２００年の間、富山前田家１３代の居城でした。

現在の城址公園は、この富山城の跡地であり、郷土博物館も城址に建っています。でも、現在の公園や街並みを見て、富山城の姿を想像することは難しいと思いませんか。そこで、博物館のリニューアルオープンを機に、まずは今私たちが暮らす街と昔の富山城のつながりを知るため、明治時代以降の富山城址の変遷を見てみることにしましょう。

明治時代後期の富山城址

石垣を南から堀越しに見たところです。現在は右の石垣上に天守閣が建っています。

富山城と私たちが暮らす街は、どのような糸でつながっているのでしょうか。

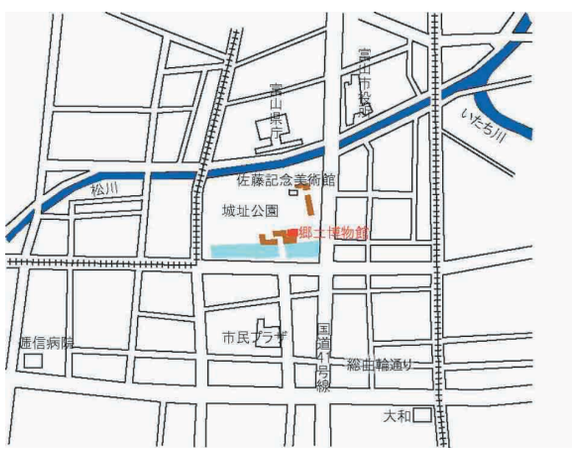
富山城址の変遷

あなたは、城址公園を見て、富山のお城は小さかったんだなと感じたことはありますか？

確かに、現在の城址公園だけを見ると、小さいお城だったんだなと思いますよね。しかし、本来の富山城はもっと大きなお城でした。江戸時代の富山城は本丸・二之丸・西之丸・東出丸・千歳御殿（中之御屋敷）などから構成されていましたが、この内、城址公園として現在まで遺構が残っているのは本丸と西之丸部分だけなのです。それでは、城址公園と比べると、江戸時代の富山城はどれぐらいの大きさだったのでしょうか。

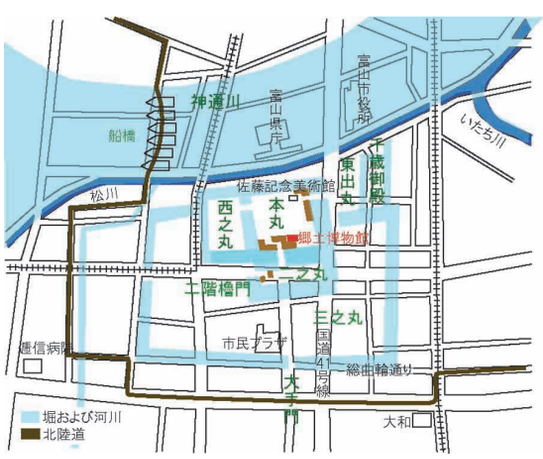
江戸時代の富山城

現在の富山城址



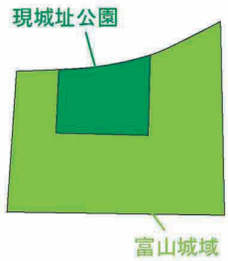
2つの図を重ねてみると…

北



※江戸時代の神通川は、富山城の北側を流れていました。明治時代以降の改修工事によって、現在の流れになったのです。松川は旧神通川の名残です。

左ページの図は現在の地図に富山城の範囲を重ねた図です。右の図は、黄緑色の部分が元の城域、濃い緑色の部分が現在の城址公園の面積を表しています。城址公園は元の城域の６分の１程度しかありません。このことから、元の富山城がかなり大きかったこと、残っている部分が全体のほんの一部であることが分かりますね。



下の図は、江戸時代の富山城の構成を示したものです。元の富山城はこんなに大きかったのです。

本 丸
藩政の中心であり、藩主の住居でもあった本丸御殿がありました。城の中心にあたります。

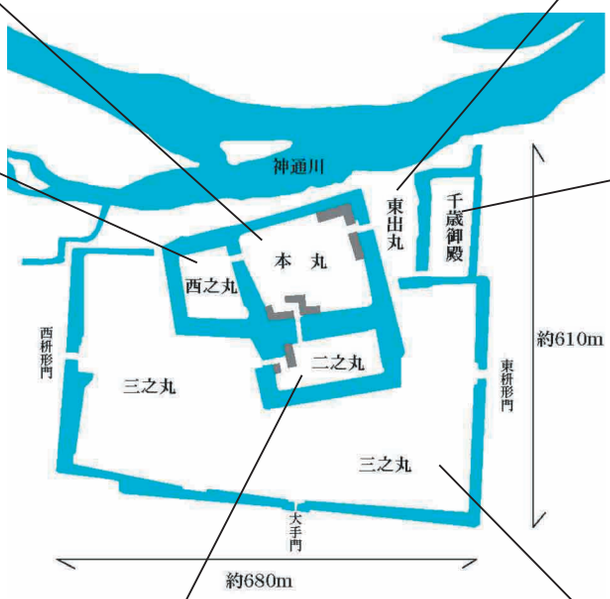
本丸御殿

東出丸
あまりよく分かっていませんが、江戸時代後期には産物方役所という役所が建っていました。

西之丸
米などを納める土蔵が建っていました。

千歳御殿
江戸時代後期、藩主を隠居した前田利保（としやす）によって千歳御殿が建てられました。

天守閣
建てる計画はありましたが、財政的な理由などから、実際には建てられませんでした。



二階櫓門

二之丸
侍（さむらい）番所や、城の内外に時を告げる時鐘所がありました。入口には富山城で最も重要で、最も立派な二階櫓門（にかいやぐらもん）が建っていました。

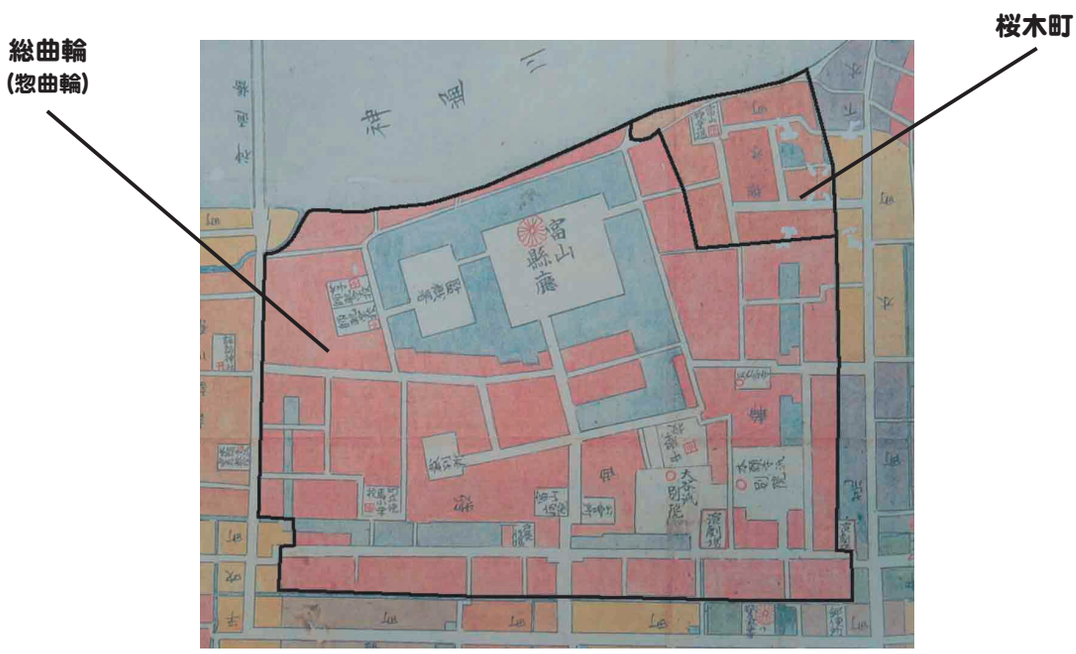
三之丸
藩の学校や役所、上級家臣の屋敷などが建っていました。富山城で最も大きな曲輪（くるわ）です。

それでは、大きかったお城がどのようにして６分の１になってしまったのでしょうか。また、城址公園部分はなぜ現在まで残ったのでしょうか。そこには富山県庁の存在が大きく関わっています。さて、県庁と城址の保存にはどのような関係があるのでしょうか。

(1) 明治時代のお話

明治という新しい時代の到来とともに、全国各地にあった城郭は大きく変化していきました。富山城も同様で、明治３年には、三之丸内、現在の本願寺東別院と西別院の間の道路から、芝園小学校（旧総曲輪小学校）の西側の道路辺りまでが、順に開墾され練兵場となりました。

その様子は、『富山高岡沿革志』（明治 28 年発行）によると、「**渺漠タル曠原ニシテ更ニ目ヲ遮キル物ナク中ニ一条ノ大道ヲ通スルノミ**」でした。つまり、建物が何もない広野に、一本の大きな道路だけが通っていたということです。



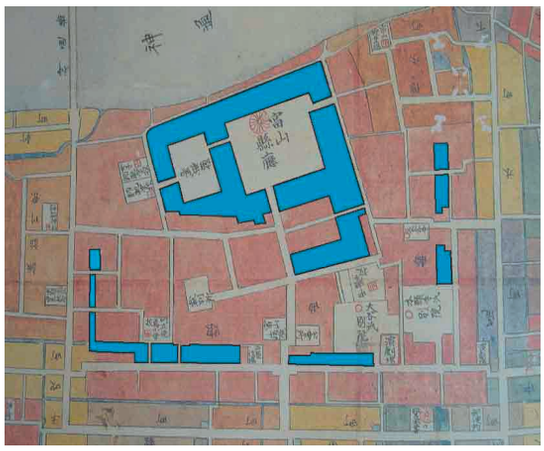
明治18年の富山市街図（部分）です。ピンク色の部分が「総曲輪（惣曲輪）」、オレンジ色の部分が「桜木町」となった所です。

そして明治６年、明治政府により廃城令が出されました。これによって富山城は正式に廃城となり、以後本格的に解体が進んでいきました。千歳御殿跡は「桜木町」、それ以外の部分は「総曲輪（惣曲輪）」という新たな地名が付けられ、順に払い下げられていきました。

明治の廃城後、解体されていったことが６分の１になった理由のようです。それでは、解体が進んでいった部分から順に、その経緯を見てみることにしましょう。

①三之丸の解体と街づくり

まずは三之丸部分です（Ｐ２の地図参照）。払い下げが進むにつれて、必要のなくなった外堀が徐々に埋め立てられていき、その跡には新たに建物が建てられていきました。この内、学校や寺院を建てる際には、砂持奉仕が行われました。有志が神通川等から石や砂を運び、堀を埋め立てる作業を奉仕で行ったのです。特に、本願寺東西両別院の砂持奉仕は大規模なものでした。富山は真宗門徒の多い土地柄ですから、多くの門徒衆が熱心に奉仕を行いました。



同じく明治18年の市街図（部分）です。青色の部分が堀が残っている部分。埋め立てが大分進んでいることが分ります。

それでは、啓迪小学校（後の八人町小学校）新築の際の砂持の様子を、当時の新聞に見てみましょう。

其模様ハ熟れも大ハ車に砂を積み載せ、車の左右前後にハ砂持等の文字を大書したる数旒の紅白旗を翻がへし、車轅の両端に長き縄を結付け、七ハ歳の小児輩にハこゝが一番と晴の緋縮緬や天鵞絨の襦袢股引を着せ、華笠を冠らせなど、最と（も）美々敷扮装にて縄に取付き前駆仁和賀連の囃しを拍子にヤンヤヽヽヽと市街を打廻り行きつ戻りつ中々の賑ひなり「中越新聞」（明治 20.6.13）　ルビは原文を元に付しています。

砂を積んだ大八車の左右前後には「砂持」などと書かれた紅白の旗が翻っています。車輪の両端に結び付けられている長い縄には、７～８歳の子供たちが、一番の晴れ着を着てつながって歩いていて、囃子の拍子に合わせて賑やかに市街を行ったり来たりしています。

明治25年の市街図（部分）です。
上の図と見比べてください。

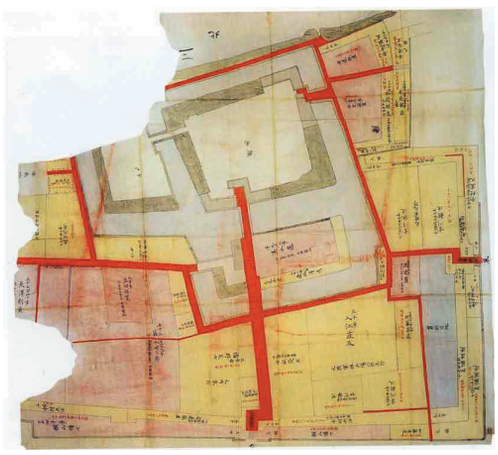
みんな明るく、賑やかに作業を行っていた様子がよく分かります。人々にとって城の解体は、“破壊”ではなく“新たな街づくり”だったのです。

旧城域を区切るように、新しい道路も作られていきました。その内、最も大きなものが先ほど「一本の大きな道路」として出てきた大手通り（現在の大手モール）です。富山城の本丸と二之丸をつなぐ土橋（どばし）、三之丸の屋敷の間の道、そして大手門跡を結んで作られました。

この通りは、県内で最も道幅が広く、昭和初期まで市役所や学校、病院、図書館、新聞社、郵便局、そして商店などが建ち並ぶ、富山のメインストリートとして賑わっていきました。大正２年には市内軌道（市電）も開通しています。

明治時代後期の大手通り

現在の大手モールです。総曲輪通りと交わる辺りから、城址公園の方向を見た風景です。



旧富山城払下図

赤色が新しく敷設された道路。地図の真中に縦に書かれているのが大手通りです。

こんなこともありました　その１

大手通りについて明治初期の地図を見ると、現在の市民プラザの辺りで鉤（かぎ）の手状に曲がっています。これは、大手門の名残です。大手門付近は、敵が侵入しようとした際に直進するのを防ぐため枡形（ますがた）になっていたのです。なお、この部分は、明治３２年の大火の後、延焼防止や消防ポンプの進行のため、一部を拡幅して直線道路に改修されました。

明治25年

拡幅前。鉤の手状に曲がっています。

明治 41 年

拡幅後。直線道路になっています。

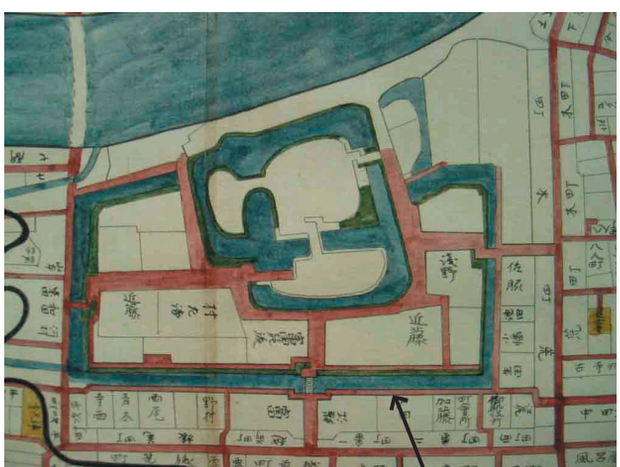
現在の総曲輪通り商店街も、外堀を埋め立てて誕生した繁華街です。泉鏡花作『黒百合』（明治３２年刊）の中に、次のような文章があります。

> 場末ではあるけれども、富山で賑かなのは総曲輪という、大手先。城の外壕が残った水溜があって、片側町に小商賈が軒を並べ、壕に沿っては昼夜交代に露店を出す。

つまり、明治時代中ごろまでは外堀の一部が“水溜り”として残っていて、現在の総曲輪通りを挟んで南側には商店が、水溜りのある北側には、道路に沿って昼夜露天商が並んでいたのです。後にこの水溜りも埋め立てられ、現在のような道路の両側に商店が建ち並ぶ商店街となりました。

昭和初期の総曲輪通り

明治初期、道路の向かって左側には、まだ堀の一部が残っていました。



現在の総曲輪通り

天保2年（1831）の富山城下図の富山城部分です。

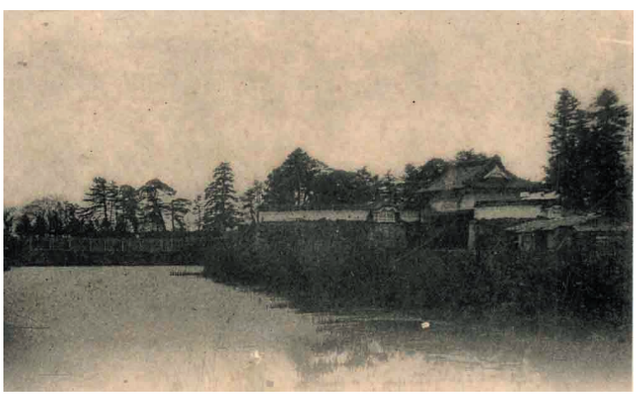
こんなこともありました　その2

廃藩置県の直前、明治３年には藩の開拓掛が、金沢から蓮根の根を取り寄せて外堀に植えたという記録があります。恐らく食用にするためだったのでしょう。

戦前から終戦後にかけても、堀に蓮根が繁殖していました。この写真は昭和 26 年の堀の様子です。

②二之丸の解体

次に二之丸を見てみましょう（Ｐ２の地図参照）。二階櫓門（にかいやぐらもん）は、明治８年に俛焉（べんえん）小学校（後の総曲輪小学校）の校舎として使用されました。しかし、同１６年に同校が移転すると取り壊され、これと前後して石垣も撤去されました。また、時鐘（じしょう）台は明治時代になってから、西町辻（にしちょうつじ）（現在の西町スクランブル交差点付近）に移されましたが、同１６年には旧本丸石垣上に再度移されました。



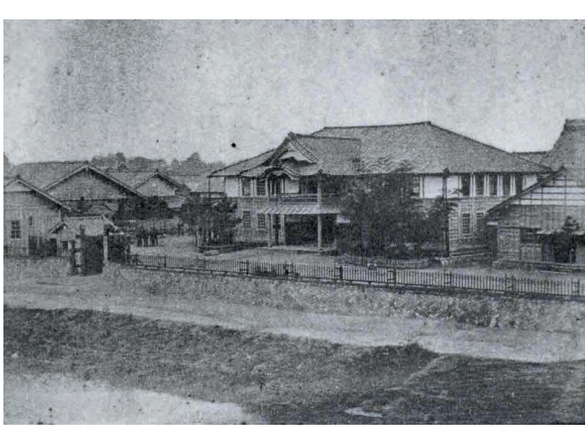
二階櫓門

門の2階部分の広さは、意外に広くて、全体で32坪（畳64枚分）ありました。この写真は、現在の丸の内交差点付近から、国際会議場の方向を見た風景です。

時鐘台

明治32年の大火で焼失するまで、人々に時を知らせていました。現在は同じ場所に天守閣が建っています。

明治２０年には西側の堀を埋め立てて、県会議事堂が新築されました。東側の堀については、同１８年に堀端に新築された富山県中学校の写真に、その一部を確認することができます。しかし、これも同３０年代初め頃には埋め立てられたようです。



富山県中学校

校舎前に、堀の一部が写っています。校舎は、現在の市営総曲輪駐車場付近に、北向きで建っていました。

明治 20 年の富山市街図（部分）です。まだ、二之丸の堀の一部が残っています。

③東出丸・千歳御殿の解体

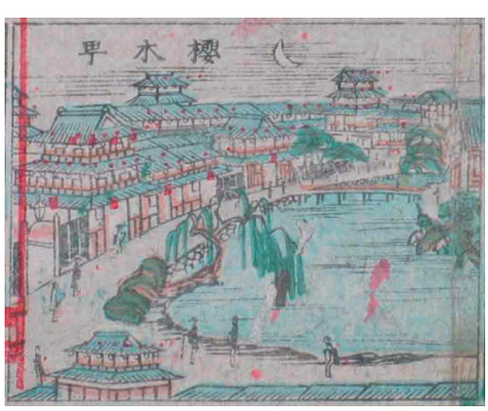
東出丸（ひがしのでまる）は、三之丸と同様に払い下げられていったようです（Ｐ２の地図参照）。

千歳御殿（ちとせごてん）には隠居した藩主が住んでいました（Ｐ２の地図参照）。しかし、明治４年に藩主一家が東京に移ると、翌年には県の命令により各地に散らばっていた芸娼妓・貸座敷（遊郭）がここに集められることになり、千歳御殿の遺構はすべて取り壊されてしまいました。新たにできた歓楽街は桜木町と名付けられました。

千歳御殿跡

こんなこともありました　その３

千歳御殿の敷地には桜が多く植えられていたことから、それにちなんで「桜木町」と名付けられたといわれます。



明治 20 年の富山市街図に描かれた桜木町の様子。

このように、三之丸、二之丸、東出丸、千歳御殿は次々と解体が進み、市街地と一体化が進んでいきました。こうした中で、本丸と西之丸部分が残された理由、富山県庁との関係とは何なのでしょうか。それでは見てみることにしましょう。